
忍者VS魔導士 第五次忍界大戦

ヤマトノオロチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍者VS魔導士 第五次忍界大戦

【Nコード】

N5909J

【作者名】

ヤマトノオロチ

【あらすじ】

うちはマダラとの戦いから3年の月日が流れた。ナルトは19歳になり上忍になっていた。ナルトは師の願いと兄弟子の夢を達成そして自身の夢と忍道のために尽力を尽くすのであった。しかし突如空から空飛ぶ船が出現し木の葉隠れの里を襲撃するのであった。しかしこれは忍界と時空管理局との壮絶な戦いの始まりであった。

プロローグ（前書き）

初めましてヤマトノオロチです。今回この作品が初めてなので不快になるかもしれませんがよろしくお願いします。

プロローグ

「暁」のリーダーたちはマダラが引き起こした第四忍界大戦、それは忍五大国の木の葉、砂、雲、霧、岩、の隠れ里が初めて忍連合軍を結成した歴史上初の出来事でした。

うちはマダラの目的はすべての尾獣を手に入れ十尾を復活させ自身に十尾を憑依させ、そしてその莫大のチャクラを使い幻術「無限月詠」を使い世界を支配しようとした。

うちはマダラはこの戦いで今までに集めた7匹の尾獣を使いそして用意周到にした策略により苦戦をいられた。しかしある少年により戦局は好転した。そして戦いは終結をむかえました。

うちはマダラは完全にこの世から消えてなくなりました。そして第四忍界大戦は終結しました。

ナルトの目的はこの戦いを止めるためそして闇に染まった彼の一番親友を救うためである。そして戦いは終結をむかえました。

うちはマダラは完全にこの世から消えてなくなりました。そしてこの戦いは忍連合軍の終了に終わり第四忍界大戦は終結しました。

しかしこの戦いで犠牲になった人々は小さなものではなかった。

そして3年の月日が流れた。

プロローグ（後書き）

なのはの時代設定「V i V i d」になります。

ヒロインはスバルになります

ナルトに出できた登場人物はかなり出す予定です。

第一話 襲撃（前書き）

少し遅い投稿になりました。
作るのに結構苦労しました。
不快になるかも知れませんがよろしくお願いします。

第一話 襲撃

「さあ、そろそろ行くてばよ」

ナルトは自宅を気持ちよく出て空を思い切りジャンプするのであった。そしてタイミングよく着地するのであった。

「久しぶりの任務張り切って行くてばよ、久しぶりのカカシ先生達との任務楽しみだってばよ」

意気揚々と喜ぶナルトであった。

第四次忍界大戦が終結してから3年の月日がたった。木の葉隠れの里はかつて「暁」の仮のリーダーペインのにより壊滅的な打撃をくらったが木の葉の人々と意識を取り戻した五代目火影綱手により予想以上の復興をどげるのであった。

綱手は過去の教訓を学び忍五大国と連携し、雨隠れの里などの小国の隠れ里とも連携を計り紛争などの争いを減らすことに尽力を尽くすのであった。

「そろそろ目的地に到着するな」

ふとナルトは空を見上げるのであった。

「サスケ……」

ナルトは今は亡き親友のことを思い出すのであった。

見上げ続けるとその時ナルトは異変に気付くのであった。

「なんだあれは空がひかっている？」

突如空が光だしそしてそこから現れたのは空を飛ぶ船であった。だがそれはナルトが今まで見た事のない形状をしていた。

「なんだあればいいたい」

「ナルト！」

名前を呼ばれてナルトは後ろを向くのであった。

「カカシ先生、サクラちゃん！サイ！」

「ナルトあれはいいたいなんなの？」

サクラはあの空飛ぶ船がなんなのか問うのであったが

「俺もあれがなんなのかわからね」

謎の船はただ静かに木の葉隠れの里を旋回し続けるのであった。そんな中カカシだけは異変に気づいた。

「なんだあの船からチャクラを感じる。だがこのチャクラの感じまさか！」

カカシは謎の船から感じるチャクラに一筋の不安を覚えるのであ

った。

「まずいあの船のまわりから離れろ！」

「え？」

「カカシ先生何言っているんだてばよ？」

突然のカカシの慌てようにナルトとサクラとサイは不思議に思ったその時だった。

突如船から大量の光弾が発射されたであった。そして次々と光弾が辺りに着弾し爆煙がたちこめるのであった。辺りは騒然となりパニック状態に陥っていた。

「なんなんだこれはいったい木の葉が攻撃を受けている？」

「こんな」

突然の事態に困惑するナルト達であった。

「うろたえてる暇はないぞナルト！」

「理由はなんにせよ今木の葉が攻撃を受けている」

「すぐに行動に移すぞ！」

カカシは慌てるナルト達をを冷静にする。

「サクラ！お前は負傷者の治療と避難誘導を頼む。」

「わかりました。」

「そして俺とナルトとサイは正体不明の船の迎撃に当たる。」

「俺達だけでやるのか？」

「木の葉には空を飛ぶ力がない、対抗できるのはサイの術のしかない。今人選を選んでいる暇はない。」

「わかったてばよ、確かに今俺達だけしか止めることはできないてばよ」

ナルトすぐに理解するのであった。

「サイ行けるな？」

「行けます。」

サイはすぐに用紙を取出し墨の付いた筆で用紙に大きな鳥の絵を書き上げた。

「忍法、超獣戯画！」

そう呼ぶと絵の大きな鳥が実体化するのであった。実体化した鳥に直ちに3人は乗り込むのであった。

「では、サクラ後は頼んだぞ。」

「わかりました。」

「サクラちゃん気を付けるだってばよ。」そしてナルト達を乗せたサイの超獣戯画で実体化した墨の鳥が高く飛び上がるのだった。

「でかいですね」

「やっぱりみたことない船だ」

ナルト達は船の頭上を飛び続けるのであった。「よし、俺とナルトが敵船に乗り込む。サイ、お前は外から敵を引き付けてくれ。」

「わかりました」

「よし、乗り込むぞナルトナルト！」

「オッス！」

2人いかは勢いよく飛ぶのであった。

「影分身の術」

「螺旋丸！」

ナルトは影分身を一人作り螺旋丸を使って船の甲板をぶち抜くのであった。

「よし、侵入するぞ！」

「わかっているてばよ」

2人は空いた穴に乗り込むのであった。そして侵入したナルト達の前に現われたのは

「忍に侵入されたぞ！迎撃しろ！」

「なんだあれは忍じゃないのか？」

ナルトが疑問に思うのは無理もなかった。ナルト達の前現われたのは忍ではなくジャケットの格好してまた手には杖を携えていた。そして1人が杖を縦状にすると杖の先から光球が出てきて打ち出してきたのだ。「なんだこれは、忍術でなさそうだ」

「相手が忍ではないからと油断をするな、ナルト！」
敵の使う未知の技に困惑するナルトだがカカシはすぐに冷静に対処

をする。

「くそが、すばしこい」

カカシは敵の攻撃を的確に避けていき敵の懐に近づくのであった。そして相手を次々と倒していくがまた新たに増えていきなかなか進めずにいた。

「きりがない。しかもこう通路が狭くては避けにくい、このままではいづれ」

「だったら道がないなら作ればいいてばよ！」

突然ナルトは通路の壁に向かって

「影分身の術！」

「螺旋丸！」

ナルトは壁に螺旋丸をぶつけ道を作るのであった。

「カカシ先生こ敵は俺が引き付けるカシ先生はこの船を止めてくれ」

「むちゃをするな！敵の力は未知数だお前だけで・・・」

「大丈夫だってばよ、別に全員を相手するわけないから、あくまで陽動だってばよ、それにこのままだと俺達が追い詰められてしまう。」

」

確かにナルトの言っているのは正しい、このまま行けば体力を消耗して追い詰められてしまうと。

「・・・よしわかった敵は人だからこれを操縦しているやつがいるはずだ。俺はそいつを止める。陽動頼んだぞ！」

「オッス！」

「多重影分身の術!!！」

ナルトの周りに多数の影分身が次々と出現し相手はそのことに驚くのであった。

「・・・なんだこの数は!!！」

「みんな一気に行くぞ」！

「オオオ———！」〔影分身のナルト達〕

ナルトは次々と敵を押し倒していくのだった。

「うまくいったようだな、頼んだぞナルト！」

カカシはナルトの陽動により警備が手薄になったためその隙に別ルトを進むのであった。

「螺旋丸!!」

螺旋丸の一撃により数人が吹き飛びそして数十人のナルトの影分身が次々となだれ込むのだった。

「防ぎきれない！」

「このままだと全滅してしまう、撤退だあ！」

「逃がさないてばよ！」

撤退する相手に追撃しようとするがその時だった。

ナルトの足下に謎の陣が現われたのである。そしてその陣がナルトを中心に光出しナルトを包み込んでいくのだった。

「なんだってばよこれは？体が動けねてばよ」

「うはあああああ！」

そしてナルトを包んだ光はそのまま小さくなりナルトごと消滅しナルトは姿を消した。

第一話 襲撃（後書き）

次回からナルトはミッドチルダで活躍します。

またオリジナルの敵やオリジナルの忍術も出す予定です。

後ナルトは九尾の力を完全にコントロールできるようになっています。

第二話 異世界ミッドチルダ（前書き）

ようやく軌道にのりました。

ようやくなのは達登場です

あとナルトの原作に出てきたあのコンビが出てきます。

かなり良いだと思います。

第二話 異世界ミッドチルダ

光に包まれ意識を失ったナルト、意識を取り戻し目が覚めるとナルトは異様の光景を目にするのだっ。

「なんだこれは、俺てばさっきまで船の中にいたよななんていつのまに外に戻ってあたんだ？」

ナルトが疑問に思うのも無理もなかった。さっきまで船の中で戦っていたはずなのにナルトの周りには木々が群生しており森の中にいたのだった。「とにかく木の葉に戻らないと、だけどここはいったい何処なんだ？」

ナルトはここがどこなのかわからなかった。そもそもここが木の葉なのかわからなかった。

「しかたね、仙人モードでこの辺りを調べるか」

ナルトは座り込み両手を合わせそして目を閉じるのだった。

仙人モードとはかつてナルトが妙木山「みょうほくざん」で修業し身に付けた術である。生物の内存在する精神と身体のエネルギー。これに外の自然エネルギーを加え、練りこんだものを仙術チャクラといゆ、仙術チャクラは忍術を飛躍的に向上させる。また仙人モード時他者のチャクラを広範囲に感知することができる。ナルトは仙人モードで周囲に人がないのか調べるのだった。

ナルト「・・・・・・・・・・よし！見つけた！」

ナルトが目を開いた時目のふちに隈「くま」ができていた。ナルトが仙人になった時の証である。

ナルト「少し遠い何人が見つけた。よし！行くてばよ」

ナルトは仙人モードで感じた場所に向かうのだった。

スバル「なのはさん！おひさしぶりです。」

なのは「うん！スバルも元気そうだなによりだよ、ほらヴィヴィオも挨拶するんだよ」

ヴィヴィオ「はぁーい、スバルお姉ちゃんもお久し振りです。」

スバル「うん、ヴィヴィオも元気してただいぶ見違えるようになったね」

スバル「そして、ティアー！久しぶり」

そう言うとスバルはいきなりティアナに抱きつくのだった。

ティアナ「ちょっとこのバカスバルいきなり抱きつくんじゃないの！
」

スバル「ええ〜いいじゃない久しぶりなんだからさ」
ティアナ「まったく相変わらずなんだから」

「エリオとキャロも久しぶり、エリオ背がかなり伸びている。別人かと思ったよ」

エリオ「スバルさんお久しぶりです。」

スバル「でも、こうやってみんなと会う本当にですね」

なのは「そうね、みんな元気そうで何よりだよ」

この会は時空管理局旧機動六課〔遺失物調査部〕の元メンバーによる同窓会のようなものである。かつて時空管理局を震撼させた大規模テロ事件通称JS事件で活躍した部隊。今回そのおもだったメンバー達による会である。

スバル「そういえばフェイト隊長や八神部隊長はどうさたんですか？まだきていないですけど？。」

スバルは上司であるフェイトとはやてがこないこと疑問に思うのだった

ティアナ「フェイトさんなら少し遅くなるついていたは」

ティアナはスバルの質問に答えるのだった。

ティアナ「そういえば八神部隊長はこの会には出席できないて聞いています。」

スバル「八神部隊長これないんですか？」

なのは「うん、今例の事件の捜査で休みが取れないて聞いているよ」

スバル「例の事件て？」

ティアナ「あんたでも聞いているでしょう？本局の次元航行艦隊のLS級艦船5隻が突然行方不明になった事件。」

スバルはティアナの言っている事件の事をすぐに理解した。

「ああ、そういえば」

この4ヶ月前に巡行途中だった次元航行艦隊所属のLS級艦船5隻「ブリュッセル」、「デーグナ」、「ユグドラシル」、「エクセリオン」、「ベイバロン」が突然次々と行方不明になる事件が起きていた。突然なんの前触れもなく次々行方不明になり時空管理局で「JS事件」事件以来の重大事件と報じられた。未だに行方不明の艦船の行方は不明、乗員の安否はいまだにわからずじまいの状態である。

なのは「で、その事件を捜査している捜査官の一人がはやてちゃんてわけなの、だからこの同窓会には参加できないってことけっこう残念そうに言ってわ」

スバル「そうなんですか・・・」

一瞬スバル達の周りが静かになった。

なのは「はぁーい、もうこいつた暗い話は今はもうやめましょう。今日は久し振りにみんなと会えたんだから今日は楽しく遊びましょう。」

なのはは暗くなった空気をなんとか元に戻すのだった。

スバル「そうですね。」

ティアナ「確かに私達が今悩んでも仕方ないがありませんですよね」

なのは「そうそう、もうすぐフェイトちゃんやヴィータちゃん達もうすぐ来るしね」

スバル「そうですね、ようしティア早く料理を食べにいこう。」

ティアナ「ちょっとスバル服引っ張らないでよ！」

なのはその光景に満面の笑みを浮かべるのだったスバルはティアナを引っ張り料理のあるテーブルに向かうのだった

同窓会の行われている建物から少し離れた所にある森で2つの影が建物を見続けるのだった。

「……？」「しかしよ、なんで女やガキを殺しに行くのになんで俺達二人がかりださなければいけないんだよ？」

一人は布に赤色の雲の模様をした黒装束を着て胸元を少しさらけだし三刃の大鎌を携えた男

「……？」「飛段！文句を言うな命令だ仕方なからう、それにただの女子供だと思うな、死ぬぞ」

もう一人も同じく赤色の雲の模様をした黒装束を着い頭には頭巾をかぶり口にはマスクを付ける男。男は愚痴を溢す相方を嗜める。

飛段「それを俺に言うかよ角都よ？まあ確かにてめえみたいにガキに油断してやられちゃ惨だめがな」

茶化すかのように言う飛段

「ふん！貴様みたいにガキに油断して体をバラバラされた挙げ句には生き埋めにされた貴様のほうが惨めだがな」

「なんだと！？角都てめえ！」

角都の一言で簡単に切れだす飛段

角都「無駄話はそこまでにするぞ、とっとと始めるぞ」

飛段「おい！？角都、ちい！しゃあねなわかったよとっとと殺るか、全員を殺すのか？」

角都「いいや、金髪で目の色が異なるガキは連れてこいと言っている」

「めんどくさいなまったく、それじゃあいつらジャシンの生け贄にしてやるぜ！」

二人は飛び上がり建物へ向かうのだった。

第二話 異世界ミッドチルダ（後書き）

あの不死コンビが登場です。

次回からなのは達が不死コンビと戦います。

また他の暁のメンバーを出す予定です。

第三話 遭遇（前書き）

前の話はいろいろあって削除しました。話をすこしかえました。

ではどうぞ。

第三話 遭遇

フェイト「遅くなってごめんねなのは」

なのは「別に気にしていないから大丈夫だよフェイトちゃん」

エリオ・キャロ「フェイトさん！」

フェイト「エリオ・キャロこうして直に会うのはひさしぶりね」

エリオとキャロは久し振りにあったフェイトにたいして満面の喜びをするのだった。

スバル「ヴィータ副隊長お久しぶりです。」

ティアナ「お元気そうで何よりです。」

ヴィータ「ああ、スバルにティアナ久しぶりだな」

シグナム「なんだヴィータ久しぶりに会ったんだもう少し喜んでもいいだぞ」

ヴィータ「うるせえ！シグナム大きなお世話だ」

シグナムはまるで茶化すかのようにヴィータをからかうのだった。

シグナム「スバル、そしてティアナお前達の武勲は私にも届いているぞ」

スバル「あ！、ありがとうございます。」

ティアナ「スバルあんま調子にならない」

スバル「いいんじゃない、少しぐらい」

なのは「にゃはははは、でもこうやってみんなそろそろなんて本当にひさしびりだね」

フェイト「本当にそんね、なのは」

一方その頃建物に近づいていた角都と飛段は建物の壁側に立っていた。

飛段「さあって、それじゃ殺るかな、角都頼むぜ」

角都「貴様にいわれなくてもな」

角都は左腕を出し拳を出した。すると角都の拳は黒づんでいき壁に向かって拳を振り下ろすのだった。

一方そのころなのは達はギンガ達の到着を待ちながらにぎやかな光景になっていた。しかしそんな中シグナムだけ異様な気配を感じていた。

シグナム「なんだこの気配は」

フェイト「どうしたのシグナム？一人だけそんな顔してして」

フェイトはいち早くシグナムの異変に気付いた。

その時だった。突然壁が吹き飛ばされのだった。そして辺りは粉塵と煙が立ち込めるのだった。

ティアナ「なんなの！？」

フェイト「これは一体」

突然のことに辺りは騒然となるのだった。

キャロ「あ！あそこに誰かいます。」

キャロは煙が立ちこめている所に指を指すのだった。

煙の中からおぼろげに現れたのは二人組の男だった。二人とも赤色の雲の模様のある黒衣を着ていた。一人は胸元を開け三刃の大鎌を携えた若い男。そしてもう一人は頭巾を被り口にはマスクを覆い素顔を隠していた。

シグナム「まずい、この二人は危険だ！」

シグナムはすぐにこの二人の危険をすぐに感じとった。武人としての感をかんじとった。この二人は数えきれないほどの人間を殺しているのを感じとった。

飛段「へえ、本当に女ガキばっかだな、てゆうか本当に強いのか？」

角都「見かけに惑わすな、死ぬぞ」

飛段「だからそれを俺にゆう……」

角都「!?!」

フェイト「えっ!?!」

ヴィータ「シグナム!?!」突然であった。いつの間にか着ていた騎士甲冑を身に纏っていたシグナムは自信の剣型のアームドデバイス「レバアンティン」を抜き飛段の懷に飛び込み飛段の腹部を貫いたのだ。

スバル「シグナム副隊長!?!」

フェイト「シグナムいったいなににお!?! いくら相手が得体の知れないだからっていきなり攻撃をするなんて」

シグナム「すまないテストロッサだか今ここでやつらを倒さないと」

シグナム自身この行為は管理局局員として間違いであること。しかしその後シグナムは信じられないものをみるのだった。

飛段「ああ、痛てえななにしやがんだよ」

シグナム「!?!」

スバル「え!？」

ティアナ「嘘!？」

それはそこにいた人間が誰もが驚いた。確かにシグナムのレバアンティンは飛段の心臓を確実に貫いていたにもかかわらず飛段はまるでぜんぜん効いていないような表情でした。

シグナム「馬鹿な! 確かに心臓を貫いたはず」

刺した本人であるシグナムはまるで信じられないような表情をした。無理もなかった心臓を貫かれれば確実に死んでいるはずなのに飛段はケロッとしていた。

ヴィータ「いったいどうなってんだ」

スバル「ティア、これっていったい？」

ティアナ「私を知るわけないでしょう」

シグナム「お前はいい」

飛段「てゆうかてめー！いつまで刺してだよ、死なねえけど痛てえだよ！」

飛段は心臓が貫かれていることよりもむしろ刺さったままのことで怒っていた。飛段はそのまま携えた三刃の大鎌をシグナムに切り付けようとするがシグナムはすぐに回避してフェイト達のところまで後退するのだった。

ヴィータ「シグナム大丈夫か！？」

シグナム「ああ、大丈夫だ」

フェイト「シグナム無茶しすぎよ」

シグナム「すまないテストロッサ」

ヴィータ「それにしてもあいついったいなんなんだ心臓を貫かれているのに平気だなんて」

ヴィータは敵の異様な気配に不気味なものを感じるがその後角都から衝撃的発言をするのだった。

角都「無駄だ、飛段は不死身だ。」

全員「!!!!」

角都の衝撃的発言に誰もが驚くのだった。

スバル「不死身!？」

ティアナ「そんな嘘でしょう？」

ヴィータ「てめえ! ふざけてるのか!」

角都のありえない発言にヴィータは信用できなかった。

角都「ふん、俺はその馬鹿と違って冗談はいわん」

まるで馬鹿にしているような発言に飛段は怒りをあらわにするのだった。

飛段「角都!! その馬鹿とはどうゆうことだ!」

飛段は馬鹿にするような発言をする角都に怒鳴り挙げるのだった。

ヴィータ「やろー！ふざけやがって！」

シグナム「やめろ！ヴィータ挑発に乗るな。それにおそらくあの男が言っていることはおそらく本当だ」

ティアナ「！？」

スバル「ええ！？」

ヴィータ「なんだって！？それはいったいどうゆうことだ」

シグナムの言葉に驚くヴィータであった。

シグナム「やつを貫いた時確かにやつの心臓を貫いたただかやつは死ぬどころか倒れようもしない。」

ヴィータ「信じられね本当に不死身なのか？」

今だに角都の言っていることを信用できないヴィータであった。

なのは「貴方たちは一体何物ですか？どうしてこんな事を？」

なのはは襲撃してきた角都達に襲ってきた理由を問いだすのだった。

角都「これから死にゆく貴様達にいつても仕方ないことだがいいだろ教えてやろう。俺達の目的はそこにいる金髪でオッドアイの目のガキを連れて行くことだ。」

スバル「ええ！？」

フェイト「それって？」

なのは「まさか！！」

角都の言葉に一同は驚きヴィヴィオに目を向けるのだった。

ヴィヴィオ「わ…私！？」

ヴィヴィオは自身が狙われていることに驚きのだった。

なのは「貴方たちヴィヴィオをどうするつもりですか？」

角都「これから死にゆく貴様達に知る必要はない」

ティアナ「何ですって!」

シグナム「高町!!」

なのは「シグナムさん」

シグナムはなのは達の前に近づき話かけるのだった。

シグナム「高町・お前はお前はヴィヴィオを連れて逃げろ」

なのは「シグナムさんなにを言っているの?」

シグナム「敵がヴィヴィオを狙っている方が一に備えて非戦闘員を連れて逃げろ! 私達はここで食い止める」

なのは「そんな危険です。」

フェイト「そうよシグナム危険だよ、ここはなのはも参戦させたほうがいいが…」

シグナム「わからないのか!!? 今できる最善の方法た!!ここ
で今全員やり会えばかなりの死傷者がでる。」

フェイト「!!、シグナムがこんな表情を出すの初めて見た。」

つねに冷静沈着の「烈火の将」であるシグナムがここまで焦りの表情をだすことにフェイトは内心では驚きを隠し切れなかった。それほどにこの二人の危険を肌で感じていたのだ。

角都「どうやら逃げる算段をしているようだが無駄な事だ。」
そうゆうと角都は術の印を結びはじめるのだった。

角都「雷遁!! 圧坐無〔あつざむ〕!!」

角都は術の名前をゆうと突然辺りに地鳴りが響くのだった。

スバル「な…なにこれ地震?」

すると建物の周りに巨大な石柱が多数出現し建物のまわりを覆った。
その後石柱から電流が発生し石柱の周りを覆った。

ティアナ「なに!!? これ魔法?」

キャロ「召喚魔法にも見えますけど何か違います。」

エリオ「あの人僕やフェイトさんと同じく「電気」の魔力性質を持っている。」

敵の使う謎の術に驚きを隠せないのは達であった。

シグナム「くう…！これでは後退することが出来ない。」

角都「これで逃げ道は失ったな」

シグナムは顔は冷静にしているが心の中ではここからどうするか模索していた。そんな時なのはシグナムに話し掛けるのだった。

なのは「シグナムさん」

シグナム「高町！？」

なのは「こうなっては仕方ありません。ここで戦ってヴィヴィオを守りましょう。」

シグナム「しかし！」

フェイト「シグナム、貴方の顔を見て相手がどれだけ危険わかりました。だけど後退ができない以上彼らを倒して捕縛するしかありません。」

いい終わるとフェイトは手に持っていた「バルディッシュ」を起動させるのだった。

フェイト「バルディッシュアサルト、セットアップ!!」

バルディッシュ「セットアップ」

フェイトはバルディッシュを起動させBJ「バリアージャケット」を身に纏いバルディッシュは大鎌のサイスフォームに変形にした。

フェイト「貴方たちを拘束します。」

フェイトは角都と飛段にバルディッシュを向けるのだった。

飛段「へえ!、威勢のいい姉ちゃんだな……いいぜてめら全員ジャシンの生け贄に捧げてやるぜ!!」

ついに忍と魔導士との戦い切って落とされた。

第三話 遭遇（後書き）

ナルト疾風伝風な予告です。

スバル「ティアこの人達強い」

ティアナ「ええ！、戦力はこっちが上なのにあいつら互角に戦っている。」

スバル「それにあの人達あたし達が知らない魔法を使ってくる。」

ティアナ「あれが魔法かどうかすら怪しいは」

角都と飛段の攻撃に徐々に追い詰められるなのは達、だがその時スバル達を救ったのは一人の青年だった。

スバル「ええ！？、この人は」

ティアナ「なんなのこいつはいいたい！」

次回 出会い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909j/>

忍者VS魔導士 第五次忍界大戦

2010年10月11日04時49分発行